

## リチャード・ローティ概見

### 0. はじめに

- i) 勉強会の概要
  - 本勉強会の目的
    - ①リチャード・ローティという特異な哲学者の紹介
    - ②それを通じ、次回以降の勉強会に向けて自分自身の思想的背景を提示すること
  - 本勉強会の構成
- ii) 前提として
  - 哲学の目的とは何か
    - ①世界とは何か、世界の構造を明らかにすること
    - ②善く生きるとは何か、人間にとっての善き生を模索すること

### 1. 哲学の終焉

- i) 言語論的転回をもたらした真理の消失  
言語論的転回とは何か  
*「デカルト以降の近代哲学が「意識」を考察の出発点としたのに対し、二〇世紀の現代哲学が「言語」を基盤にして展開されたことをさす。特に、フレーゲ以後の分析哲学の興隆をさすことが多い。」<sup>1</sup>*  
  
ウィトゲンシュタインの「七つの命題」と「言語ゲーム」  
→それまで理性などによって発見されるはずであった真理は消失する  
⇒存在を言語が表象するのではなく、言語が存在を構成する  
  
➤ それまで支配的な潮流であった「プラトン主義」に対する懐疑が生じる
- ii) 哲学の終焉  
このような「プラトン主義」の凋落の中、ローティはさらに踏み込んだ提示を行う

- 形而上学・認識論の放棄
 

人間の心、理性といったものは自然を映す鏡であるという古来よりの前提  
 そのような自然の鏡に適ったものだけが正しいものとして認められ得る  
 →そのような不確かなものに基礎付けを求めることは健全か

少なくとも人間の心が存在を完全に表象できるという確証はない  
 ⇒基礎付け主義 (fundamentalism) の放棄へ  
 そもそも形而上学的な真理に拘泥することが無益であると主張
- 体系的哲学から啓発的哲学へ
 

従来の哲学の役割は体系的に、確かな真理について言明すること  
 →しかし真理が消失した以上、求められるのは自らを解釈していくこと

➤ 哲学の在り方、ひいては人間の追求すべきものも変質しているのである

## 2. リベラル・アイロニスト

基礎付けを放棄することによって人間にとっての発見すべき規範は存在しなくなる  
 極めて不安定な状態となる、それに如何にして対処するか  
 →ローティは、この問題を公と私へ二分して考えることで解決しようとする

### i) ニーチェ的な個人であること

ニーチェが自己の価値を懐疑し、新たに価値を創出しようとしたように、人間は個人としての自己を、自らを解釈していくアイロニストとして存在させなければならない  
 = 「終極の語彙 (final vocabulary)」を疑い、闘わせ続ける者でなければならない

→アイロニストであるということは歴史的・地域的影響を受けた特定の価値に懐疑の目を向けるということ

### ii) ハーバーマスの社会的な社会の構成員であること

ハーバーマスがコミュニケーション的理性を用いた公共圏の構築を主張したように、人間はリベラルな社会的協働を目指すことが必要である  
 →リベラリストであるということは普遍的な特定の価値を尊重するということ

- ✓ では、何故二つの相反する考えが共存し得るのか

### 3. ネオ・プラグマティズムという考え方

#### i) プラグマティズムとは何か

「一九世紀後半以降、アメリカを中心に展開された反形而上学的な哲学思想。デカルト以来の意識中心の立場を批判して、行動を重視し、思考・観念の真理性は環境に対する行動の結果の有効性から実験的検証を通じて帰納的に導かれるとする立場。パース・ジェームズ・デューイらによって創始され、現在では分析哲学との結びつきを強めてクワイン・ローティらのネオ・プラグマティズムに引き継がれている。実用主義。」<sup>2</sup>

→プラグマティズムはイギリス経験論の流れを汲む思想であり、その特徴は

- ①人間の経験を重視し、経験不可能な事象に関して真理は知り得ない
  - ②真理とは人間にとって有用であるかどうかによって判断されるべき
- という二点を大きな特徴とする

⇒だが初期のプラグマティズムは、トクヴィルが

「文明世界のうちでアメリカ合衆国ほど[いわゆる体系的な]哲学が人々の心を少ししか占めていない国はない。・・・しかし彼らのほとんどすべてが、ある種の哲学的方法を身につけている。」<sup>3</sup>

と述べているように、あくまでも自明的に存在したパラダイムを具現化しただけのものであって、明晰な形而上学の否定に立脚するものとは言い難い

#### ii) ローティにおけるプラグマティズム

ローティはそのような中で、特にプラグマティズムの真理に関する言明に着目する「プラグマティストの考えでは、〈真理〉や〈善〉を孤立させようとする試み、つまり「真の」とか「善い」とかいった語を定義しようとする試みの歴史をみれば、こうした分野では面白い仕事など何もできないのではないかと疑わずにはいられない、ということになる。」

「したがってプラグマティストは〈真理〉や〈善〉の本姓について問う必要がないと言うわけだが、だからといってそのとき彼らは、実在や知識や人間といったものの本姓に関して、〈真理〉や〈善〉「などといったものは存在しない」と主張するような議論に訴えているわけではない。(中略)プラグマティストはただ主題を変えたいと思っているだけなのだ。」<sup>4</sup>

→ローティは、何よりもまず思想の問い方というものの自体へプラグマティカルな発想を導入しようとした

⇒リベラル・アイロニストという理論もまた、その考え方から必然的に導き出されたものなのである

#### 4. おわりに

##### 【参考文献】

- リチャード・ローティ 『哲学と自然の鏡』 産業図書 1993年
- リチャード・ローティ 『偶然性・アイロニー・連帯』 岩波書店 2000年
- リチャード・ローティ 『哲学の脱構築』 御茶の水書房 1985年
- 渡辺幹雄 『リチャード・ローティ ポストモダンの魔術師』 春秋社 1999年
- 仲正昌樹・他 『現代思想入門』 PHP 研究所 2007年
- 中山康雄 『科学哲学入門』 勁草書房 2008年
- 魚津郁夫 『プラグマティズムの思想』 ちくま学芸文庫 2006年
- 永井均 『ウィトゲンシュタイン入門』 ちくま新書 1995年

---

1 大辞林

2 大辞林

3 魚津、2006

4 ローティ、1985